

VPDCA サイクルを活用し、 積極的生徒指導の視点に立った生徒会活動の支援のあり方

吉田 将 康

本稿は、生徒会活動を通して、規範意識を育みながら全ての生徒の「自己指導能力」を高めるために、生徒会活動への効果的な教員の支援のあり方を考察し、その具体的な方策を提起することを目標としている。これを達成するために、平成28年の中学生徒会執行部を中心とした中学校生徒会活動に対して具体的な実践に取り組んだ。その結果、生徒会活動を通して、規範意識を育みながら全ての生徒の「自己指導能力」を高めるためには、生徒が生徒会活動を総括し改善策を考える段階で教員が意図的に活動テーマとなる目標や目的を関連付けたり、教員が情熱をもって積極的生徒指導の視点で生徒に関わったりする支援が有効であった。一方、エビデンスが示された総括資料を用いて話し合いをする場面で、自分が集団に対して役に立っているという気持ちを生徒がもてる話し合い活動を仕組むための手立てや、全職員で共通認識ができていくアクティブ・ラーニング型の積極的生徒指導に取り組む方策とその手順を明らかにする課題があった。

1 はじめに

平成25年6月28日に公布された『いじめ防止対策推進法』では、生徒が安心して学校生活ができる環境を整え、いじめの早期発見と迅速な対応が学校現場に求められている。その一方で、国際調査や国内調査では、教員の過重な労働時間や事務作業の増大などの問題点が指摘されており、生徒と向き合う時間が少ないと感じている教員も多く存在する。

学校では、生徒と生徒、生徒と教員が互いに良好な人間関係を保ちながら様々な学校行事や取り組みが実施されるようにしなければならない。この基盤には、生徒自身による自治の機能が発揮された生徒会活動が必要であり、それを効果的に促すための教員の支援も重要である。

本稿においては、生徒会活動の中心となる生徒会執行部への教員の支援のあり方について論じていきたい。そして、生徒会活動を通して、豊かな人間性を育みながら生徒一人ひとりがいきいきと学校生活を送るための方策を明らかにしていく。

2 研究主題の意味

(1) VPDCA サイクルとは

学校は組織的な運営によって成り立っている。そのなかでも、生徒会は学校に所属する全ての生徒によって構成され、その活動を推進する組織が生徒会

選挙で選出された生徒会執行部である。この生徒会執行部を円滑に運営させるためには、組織マネジメントの手法を取り入れた生徒会活動への支援が必要である。そこで、ビジネスなどにおいても活用されていて、効率よく業務を行うための理論がPDCAサイクルである。これは、第2次世界大戦後にアメリカのウォルター・シューハートとエドワーズ・デミングによって提唱された。この理論は、一連の業務に対して、行動計画(Plan)を立てて実践(Do)し、その結果を内省(Check)して、行動を変容(Action)させていくと、効率よく業務が遂行できるという内容である。この4つの過程の頭文字をとってPDCAサイクルと名付けられている。最近の学校現場でも、PDCAサイクルをいかした学校運営や校務運営などが重視されている。

しかし、PDCAサイクルをうまく活用できていない現状もある。その具体例として考えられるのは、
①計画を立てて実践するが、その結果を振り返った改善が進まない。
②実践して結果を求めすぎのあまりに、本来めざしていた目標や目的を見失ってしまう。
などが挙げられる。これらは、リーダーが現状を的確に分析できずに、自らの願望や甘い見通しに依存した計画を立ててしまい、時間が経過していくと自分の経験だけに頼ったその場限りの思いつきで事業を推進していく点が主たる要因である。

この理論を生徒会活動に照らし合わせたとき、ま

ず、生徒会執行部がどんな目標や目的のために取り組みを提案しているかを明確にする必要がある。そして、行動計画 (P) → 実行・実践 (D) に力を入れる以上に、自らの取り組みを振り返って内省や総括 (C) → 改善策 (A) を講じて、新たな目標や目的の設定につなげる作業の方に重点をおきながら生徒会活動を支援していく必要がある。

そこで、本研究では、生徒会執行部が明確にした目標や目的を Vision として行動計画 (P) から独立させて、PDCA サイクルを工夫する。

したがって、本研究における VPDCA サイクルとは、【生徒会活動を推進する生徒会執行部が、自ら目標や目的 (V) を設定し、それに基づいて具体的に実現するための行動計画 (P) を策定して実行・実践 (D) を行い、その過程や結果を内省や総括 (C) して改善策 (A) を発表 (レポート) し、新たな目標や目的 (V) につなげる一連の活動形態】という意味である。この VPDCA サイクルを活用して、生徒会活動の取り組みを推進していくための支援が重要である。

(2) 積極的生徒指導の視点に立つとは

日々の学校生活において、教科指導とともに生徒指導の重要性が増してきている。それは、いじめや不登校、授業の荒れ、反社会的な行動など、様々な要因と背景によって引き起こされる場面で、個に応じた適切な対応が求められているからである。

平成23年6月に文部科学省から報告された『生徒指導に関する教員研修のあり方について』には、次のように記述されている。

生徒指導の本質は、全ての児童生徒の自己指導能力を開発することである。それは、児童生徒が基本的な生活習慣を確立し、規範意識に基づいた行動様式を獲得するとともに、対人関係を築き、問題や対立が生じてもそれを解決し、向社会的の豊かな人間へと成長できるように促すことである。(文部科学省 平成23.6)

学校現場において生徒指導というと、学校生活に関わって起こった問題行動などに対応するイメージや、厳しく指導する一部の固定された教員がする指導というイメージをもちやすい。しかし、生徒指導は上記の文部科学省の報告にもあるように、問題行動を起こした生徒に対処療法的な指導をするだけでなく、生徒一人ひとりの個性に応じて社会に適応した自分らしい生き方ができるように、全職員で全生徒に「自己指導能力」を育成していかなければならない。つまり、特定の生徒が起こした問題行動に対処していく消極的生徒指導にとどまるのではなく、

全ての生徒を対象として、社会に適応し、その場に応じて適切な行動を自ら考え、決定し、実行する「自己指導能力」を育てる積極的生徒指導こそが重要である。

また、学級経営の視点について、生徒の活動性から見た学級集団を類型化した先行研究がある。蘭・高橋 (2009) によると、教員の指導類型を管理型指導、放任型指導、ハプスタンス型指導に分けて比較している。管理型指導では、教員が生徒の活動を管理して方向付けるため、システムが固定化しやすい反面、生徒の個性が出しづらく自主的な活動が成立しにくい問題点がある。放任型指導では、教員が生徒の活動の方向付けをしない場合が多く、集団がバラバラで固定された人間関係に依存してグループ化し、活動意欲が喚起されず自主的な行動がとれない問題点がある。ハプスタンス型指導では、生徒間で起こるアクシデント (変動) を「ハプスタンス」と定義し、教員が生徒の反応を基に生徒の活動を方向付け、アクシデントから生じる変化によって新たなシステムを構築しながら、複雑な個性がぶつかり合った自主的・自立的な活動が促せる。このようなハプスタンス型指導を実践するために必要な要素を、蘭・高橋 (2009) は次のように述べている。

ハプスタンス型指導では①生徒の「こえ」をきき、情報収集を行う、②集めた情報を分析する、③それを活用する方策を工夫する、④効果的な教室の環境・場を設定する、⑤指導者としての意図や熱意をもつ、という5点が重要な要素となっている。(蘭・高橋, 2009, P182)

これらの報告や先行研究から、生徒会活動を推進していく生徒会執行部に対して、教員は生徒の意見に耳を傾けながら、目標や目的を見失わないように、意図的で情熱的な関わりをもつ点が重要である。そして、生徒会執行部の提案を通して、全生徒を対象に、社会に適応できる「自己指導能力」を高めていく積極的生徒指導が求められている。

したがって、本研究における積極的生徒指導の視点に立つとは、【全生徒を対象として、社会に適応し、その場に応じて適切な行動を自ら考え、決定し、実行する「自己指導能力」を高めるために、生徒の考えや意見を情報として多く集めて分析し、教員が生徒の活動を柔軟に変化させながら方向付け、明確な意図や情熱をもって生徒に関わっている状態】という意味である。このような積極的生徒指導の視点に立って、生徒会活動や生徒会執行部の指導を推進していく点が重要である。

(3) VPDCA サイクルを活用し、積極的生徒指導の視点に立った生徒会活動の支援とは

次期学習指導要領にはアクティブ・ラーニングの実践が求められている。これは、教科指導に限定された考え方ではなく、道徳や特活、総合的な学習にも求められている。そして、学校生活を支える生徒指導においてもアクティブ・ラーニングの考え方を反映させた指導が求められる。アクティブ・ラーニングでは、リフレクションによる主体的な学び、インタラクションによる対話的な活動、プロセスによる深い学びが3つの柱である。そして、アクティブ・ラーニングは社会の中で起こりうる正解のない問題に対応するための学びをめざしている。

生徒会活動には、これが唯一の正解という目標や目的、それを達成する方策は存在しない。生徒会活動に取り組ませるためには、リフレクションによる主体的な学び、インタラクションによる対話的な活動、プロセスによる深い学びの3つの視点を含んだ指導が大切である。つまり、生徒会活動は特別活動であり、全ての教科・領域でアクティブ・ラーニングが必要とされている理由が、ここに存在している。教員は教科指導のみならずアクティブ・ラーニング型の生徒指導も身に付けなければならない。

したがって、本研究における VPDCA サイクルを活用し、積極的生徒指導の視点に立った生徒会活動の支援とは、【生徒との対話的な活動によって教員が目標や目的 (V) を方向付けし、VPDCA サイクルの C → A → V に重点をおいて生徒にリフレクションによる主体的な活動に取り組ませて、目標や目的 (V) を深化・発展させていき、全生徒に規範意識を育みながら「自己指導能力」を高めるように教員が手立てを講じる行為】という意味である。ここで定義する具体的な手立ては以下の2点である。

《手立て①》

VPDCA サイクルの目標や目的 (V) を関連付けた生徒会活動テーマで生徒会の取り組みを考えさせる場を設定する。

《手立て②》

C → A の段階で、生徒へのアンケート調査から抽出したエビデンスを示した総括資料を用いて、生徒が話し合う活動を仕組む。

このような手立てを用いて、生徒会活動を支援していけば、生徒の規範意識が高まり、自ら主体的に他者と対話しながら互いに人間関係を築き、学校行事や生徒会活動に「自己指導能力」を発揮して参画する生徒が育成できる。そして、本研究の内容を全教員で共通認識を図り、積極的生徒指導ができるようになると、教科教育に偏らない全人教育が実現で

きる。

これまでの内容をまとめると、図1のような研究構想図になる。

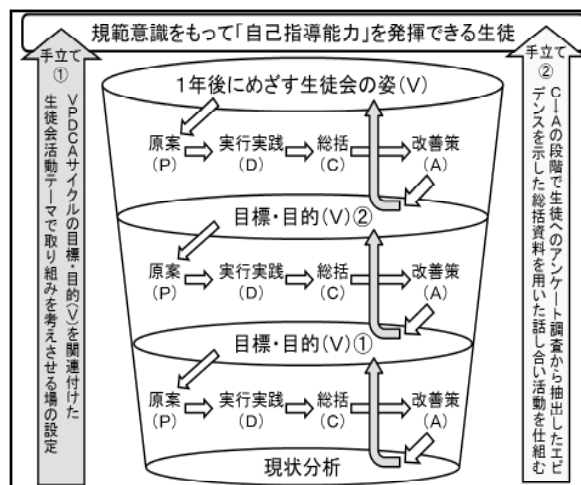


図1 研究構想図

3 研究の目標

生徒会活動を通して、規範意識を育みながら全ての生徒の「自己指導能力」を高めるために、生徒会活動への効果的な教員の支援のあり方を考察して成果と課題にまとめ、その具体的な方策を提起できるようにする。

4 研究の検証方法

生徒へのアンケート調査を4点評価法および自由記述式にて実施する。4点評価法では、生徒の肯定的意見（感情）の割合を根拠に分析する。また、自由記述式では、生徒の意見をキーワードによる分類をして分析する。これらのデータを基に、手立ての有効性と主題の達成度を評価し、成果と課題としてまとめる。

5 具体的な実践

平成28年度の中学校第3学年が運営する生徒会執行部の1年間の生徒会活動に対して実践した。特に、平成28年4月に入学した生徒が生徒会員に入会して以降の学校行事を中心に実践した。

平成28年の生徒会スローガン (V) は、【気づけ!! 自分勝手と周りの視線】である。これは、生徒会選挙後に生徒会執行部が発足し、平成27年12月25日と平成28年1月4日の2日間で実施した冬のリーダー研修会で生徒会執行部が討論し、平成28年

1月4日に決定した生徒会スローガンである。

この生徒会スローガンを決定するまでに、自ら所属する学級のよさや課題を生徒自身に分析させた。また、この時期に、校外からの連絡により、電車での乗車マナーやコンビニの利用に関する問題が挙げられ、生徒部から各学級へも伝達されていた。

このような背景のなか、リーダー研修会で生徒会執行部は、自分たちの行動を周りの人たちの立場に立って見直したとき、それが正しい評価につながっているのかという論点で話し合いを始めた。そして、一生懸命になりすぎて周りが見えなくなり、自分は正しいと思っても、それが周りの人にとって迷惑になる場合もあるという話し合いの結論にいたった。このような生徒会執行部としての考えを、全生徒が聞いて分かる言葉に表現させた。そして、生徒会スローガンの意味を具現化するために、

<観点①>個人が周りに働きかける面

<観点②>周りから見た個人を評価する面

という2つの観点で各取り組みの目的を設定していくと決定し、これから推進する全ての取り組みが生徒会スローガンを基準に総括され、次の取り組みにつながっていくように確認した。

しかし、本校では、中高連携の視点から学校行事が中学校だけの想いで生徒会活動テーマを決定できない側面もある。むしろ、事前に中学校と高校の代表者がしっかり協議してテーマを設定すべきであろう。そのため、中学生徒会活動では、高校から提示される運営方針と中学生徒会スローガンを関連付けて考える必要がある。ここに、中学生にとっては負担が大きく、活動テーマ決定までに時間が多く必要となる要因がある。2016年の生徒会活動では、図2に示す構想図に基づいて、教育実践に取り組んだ。

以下、体育祭、中学クラスマッチ、生徒会スロー

ガン総括の取り組みについて述べていく。

(1) 体育祭の取り組み

4月になり、新入生が入学してから生徒総会で生徒会スローガンについての提案をした。そして、6月に開催された文化祭では、文化祭テーマを『咲』とし、個性を生かした取り組みを進めてきた。

それとほぼ同時並行的に、高校の体育祭運営局から提案されたコンセプトは『紡ぐ』であった。中学生徒会執行部では、コンセプト『紡ぐ』に込められた高校体育祭局長の想いと自分たちが設定した生徒会スローガンとを関連付けながら、体育祭担当で中学体育祭テーマの素案を考えて執行部に提案し、審議した。

執行部会では、縦（異学年間）の関係と横（同学年間や学級内）の関係を、一人ひとりの個性を表した糸と考え、点描画を具体例として、多様な個性という色を用いて、生徒会スローガンの<観点①>競技に真剣に取り組む意識を高めるために、自分が全力で競技や応援に努力する、<観点②>中学生の規律ある姿を正しく評価してもらうために、素早く統率のとれた行動を心がけるという目的を設定した。そして、全生徒に生徒会執行部から次のような主張点で原案を提案した。

体育祭をつくっていくうえでは、中学生全員がまず、一人ひとりの色、自らの個性を最大限に発揮し、そのうえで互いの色を認め合い、相手の存在を意識しながら、調和していかなければなりません。美しい模様を織りあげるためには、中学から高校までの縦の関係と学年や学級の横の関係を把握し、自分の色がどの位置にあればいいか、気付けて行動することが大切です。

(2016 体育祭生徒原案より)

このような意味を表現して、体育祭テーマ【織り成す～一人ひとりの色を正しく組み合わせ、美しい体育祭を織り成そう～】と決め、体育祭の取り組みがスタートした。このテーマを決めるまでに、研究の《手立て①》を用いて生徒会執行部の活動を支援し、目標や目的（V）が明確な理由とともに、取り組みを総括する基準となる原案を作らせた。

8月26日から始まった体育祭練習では、研究の《手立て②》を用いて生徒会活動を支援し、VPDCAサイクルを回し続けるように、執行部と体育祭局員による毎日の練習の総括を話し合う活動に重点をおいた。そして、話し合った総括内容は、毎日各学級に掲示し、全生徒に日々の成果と改善点を伝えた。この総括用紙は全職員にも配布した。このような活動の場を設定すると、リーダーの体育祭練

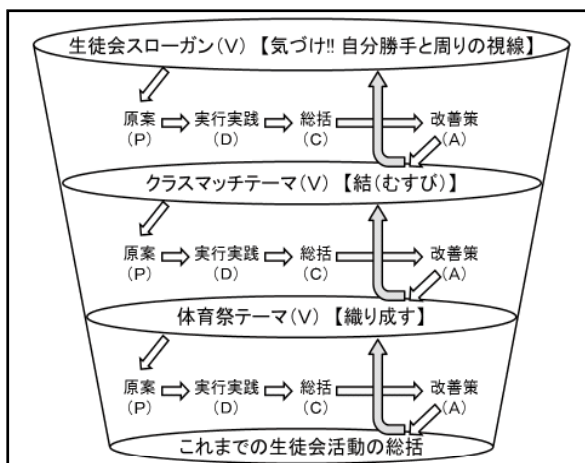
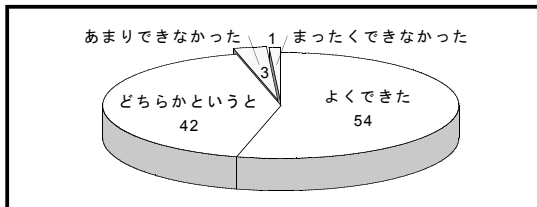


図2 生徒会活動構想図

習への取り組み方に変化が見られるようになった。特に、集団に対して、リーダーが気付いた点を的確に指示できるようになり、練習の見直しをもって、次の行動の指示や提案をしてくるようになった。さらに、厳しい内容の要求をしても、自分たちで知恵を出しあって話し合い、具体的な解決策を考えだして取り組むようになった。このような生徒会活動に取り組ませて、9月3日に体育祭は無事終了した。

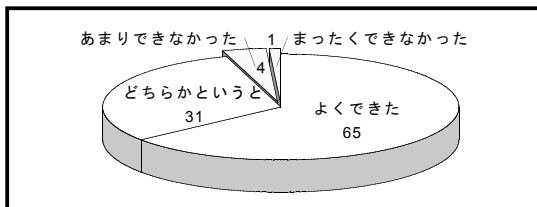
体育祭当日に、全てが終了した帰りのSHRの時間に、全生徒を対象にアンケート調査を実施した。このアンケート調査を作成するときには、研究の《手立て②》を用いて生徒会執行部を支援し、体育祭テーマ【織り成す】が達成できた程度を、できるだけ客観的に評価できるようなアンケート項目を設定し、4点評価法と自由記述式で作成させた。そして、体育祭が終わった10日後に生徒会執行部で総括素案を審議した。このとき、体育祭担当者が提案した総括素案では、エビデンスとして下のような円グラフや記述された意見が示されていた。

2016年体育祭総括 アンケート集計結果
 <質問1-I> 学年を越えた、中高間や赤・白各チーム内でのつながりを表す「縦の糸」を意識し、つながることができましたか？ また、どのような場面でつながれたと思いますか。



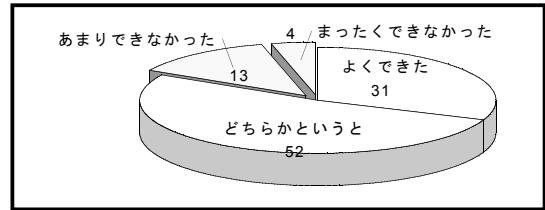
- ★学年を越えて応援した（されたとき）
- ★綱引きや早馬リレーなどの中高合同競技

<質問1-II> 各クラスや各学年内でのつながりを表す「横の糸」を意識し、つながることができましたか？ また、どのような場面でつながれたと思いますか。



- ★ JUMPING ☆ FUZOKU や HR リレー, Carry Ball Ball で声かけや応援をしながら競技したとき
- ★ 応援練習で友達と盛り上がったとき

<質問2> 毎日放課後に体育祭局会を開き、前日の反省やその日の予定などをまとめた紙を各クラスに掲示しましたが、練習にいかせましたか？ また、どのようにいかせましたか？



- ★練習中の行動が早くなった
 - ★応援で声を出すようになった
 - ★日程やルール変更が事前に分かり、スムーズに練習できた
- ※グラフ中の数値は全生徒に対する割合を示している。

特に、<質問2>のエビデンスから、前日の反省やその日の予定などをまとめた紙を読んでいなかったという人の割合が多く、十分に改善が進められなかった点が大きな課題であるという主張は強く伝えようという結論にいたった。そして、上記のようなエビデンスを利用して総括素案を審議し、体育祭テーマに関する全体総括での成果について、次のようにまとめた。

今年のテーマは「織り成す～一人ひとりの色を正しく組み合わせて美しい体育祭を織り成そう～」であり、縦の関係と横の関係を意識して、学年の枠を超えて連携し、各クラスや各学年内での絆を深めることができましたと思います。

(2016 体育祭生徒総括より)

一方、体育祭の取り組みの課題について、次のようにまとめた。

全員が高い意識で練習に臨んでいれば言われなくてもできるし、やり直しになることもないはず。また、整列隊形を覚えていない人や、アンケートにふざけて回答する人、はちまきを洗わずに返している人も見られました。だから、もう少し、一人ひとりが周りに与える影響を自覚し、集団の一人として自分がどのような行動をすれば良いのか自ら気がついて行動できるようになりましょう。

(2016 体育祭生徒総括より)

そして、次の中学クラスマッチの取り組みに向けて、全生徒に次のようにアピールした。

クラスマッチのテーマは「結」です。各行事のテーマの裏には生徒会スローガン「気づけ!! 自分勝手と周りの視線むすび」があります。クラスマッチではこれまでの行事で学んだことを活かし、自分

たちで気付いて行動することで、附属らしい生徒主体の行事とし、みんなで楽しく盛りあがりましょう！ (2016 体育祭生徒総括より)

この体育祭総括素案は執行部会で決定され、体育祭総括原案として生徒会組織の中で全生徒に提案され、意見交流をしたあとで可決された。

(2) 中学クラスマッチの取り組み

文化祭や体育祭は中高が連携した学校行事であるが、クラスマッチは中学校単独での取り組みである。そのため、生徒会スローガンが達成できているかどうかを生徒自身の活動で確かめられる機会となる。また、これまでの生徒会活動を振り返って総括してきた改善点を克服し、執行部にも、全生徒にも充実感をもたせていくための取り組みでもある。

研究の《手立て①》を用いた支援を行いながら、生徒会執行部では、体育祭総括をまとめている体育祭担当者話し合いの場を設定して、クラスマッチ実施要項素案を考えさせた。そして、体育祭総括で挙げられた課題を基に、クラスマッチテーマを審議し、次のような理由で、クラスマッチテーマを【結(むすび)】と決めた。

文化祭では色とりどりの個性の花、笑顔の花を咲かせました。体育祭では力を合わせ、各自の色を縦にも横にも紡ぎ、織り成し、美しい色彩を放ちました。

今回のテーマには、これまで咲かせた花が実を結び、織り成した糸を結ぶという願いを込めています。様々な活動に関わりながら磨かれてきた個性と、これまで培ってきたクラスの団結力を発揮し、実りある行事をめざしましょう。そして、一人ひとりがすべきことを考えて行動し、みんながより深い絆で結ばれるよう心一つにしましょう。(2016 クラスマッチ生徒原案より)

また、クラスマッチを円滑に運営するための組織として、各学級から選出されるクラスマッチ委員会に的確な仕事分担をしながら活動できる場面を作り出すという昨年の総括から引き継いだ課題もあった。これらの課題を改善しながら、クラスマッチテーマ【結】を実現しようと各学級にクラスマッチ実施要項生徒原案を提案し、可決された。

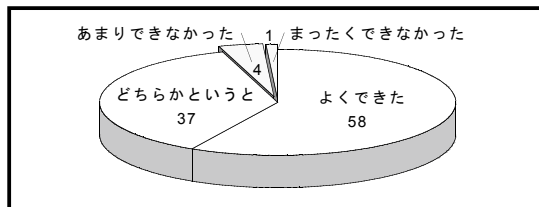
各学級とも、学級内のチーム別にクラスマッチの練習をしたり、作戦を立てたりするなど、原案に示された取り組みを実行していった。しかし、クラスマッチ前日に、中学3年生の一部の生徒がクラスマッチの練習が禁止されているにもかかわらず、体育館でクラスマッチの練習をしているという問題が起こった。

この問題は、蘭・高橋(2009)が主張する「ハプンスタンス」であり、このできごとを通して生徒個人の考えを引き出し、学級や学年、学校全体を活性化させて、集団としての機能を伸ばしていく点が重要である。また、この「ハプンスタンス」は本研究の《手立て②》の支援にも関連付いており、実行・実践(D)で明らかになった課題を、内省や総括(C)して改善策(A)を考えて、それを活用していくという点でも重要である。つまり、この「ハプンスタンス」を、生徒会スローガンやクラスマッチテーマと関連付けて、教員から生徒の問題として生徒に働きかけ、集団として話し合い解決策を見出していく活動を促す点が、積極的生徒指導の視点に立って生徒会活動を支援する具体例となる。これを、問題を起こした生徒だけを指導して終結させれば消極的生徒指導であり、また、目標や目的(V)としての生徒会スローガンを明確に意識して指導していなければ、その場での思いつきの指導と等しくなる。ここに気付く点が積極的生徒指導のスタートであり、問題が起こったからマイナスではなく、起こった問題をどのように生徒に考えさせたかが積極的生徒指導のポイントである。

生徒会執行部には、クラスマッチ当日の朝、問題の概要を伝え、今後の対応策を考えさせた。執行部の生徒は、クラスマッチ委員を中心に3年生の全学級で話し合い活動をし、1・2年生には3年生の話し合いの時間を確保するために、開会式を約10分繰り下げてクラスマッチを実施するという内容を担当者から説明するという結論を出し、それぞれの担当者が対応した。3年生の話し合いが予定時間よりも少し長引いたため、全体として約20分遅れてクラスマッチは始まった。しかし、一人ひとりが一つの問題を通して考えて行動した結果、クラスマッチは予定時間には終了できた。このような生徒会活動に取り組みせて、11月9日に中学クラスマッチは無事終了した。

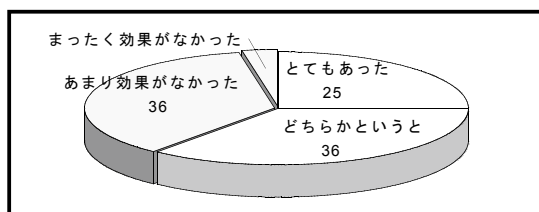
クラスマッチ当日に、全てが終了した帰りのSHRの時間に、全生徒を対象にアンケート調査を実施した。このアンケート調査を作成するときには、本研究の《手立て②》を用いて生徒会執行部を支援し、クラスマッチテーマ【結】が達成できた程度をできるだけ客観的に評価できるようなアンケート項目を設定し、4点評価法と自由記述式で作成させた。そして、クラスマッチが終わった10日後に生徒会執行部で総括素案を審議した。このとき、クラスマッチ担当者が提案した総括素案では、エビデンスとして下のような円グラフや記述された意見が示されていた。

2016年クラスマッチ総括 アンケート集計結果
 <質問1> 今年のクラスマッチテーマ「結び」を意識し、一人ひとりの個性やクラスの団結力を発揮することができましたか。



★各チームのキャプテンを中心に声を掛け合っ
 て積極的に戦い、応援することで、これまで
 の行事で培ってきた団結力がより深まった。

<質問2> 審判講習会は試合を円滑に進める
 にあたって効果がありましたか。



★審判講習会を開いたことで審判の判定が正確
 になり、試合がスムーズに進んだ。また、今
 まではきわどく判定が難しかったプレーにも
 しっかりと判定を下せた。(3年生)

★審判がきちんと試合を見ていない、ルールを
 理解していないなどの理由で判定があいまい
 だった。(1・2年生)

<質問3> 今年のクラスマッチを通して成長
 できたと思うことは何ですか？ 具体的に書い
 てください。

★生徒会スローガンを強く意識したことで周り
 を見て行動し、できていない人に対して注意
 できるようになった。また、体育祭に続き、
 時間に余裕をもって行動することができた。

★クラスマッチ委員にはっきりとした役割がな
 いという昨年の課題を、執行部の運営を手伝
 うという役割を増やしたことで克服できた。

※グラフ中の数値は全生徒に対する割合を
 示している。

特に、<質問2>のエビデンスから、3年生と
 1・2年生のアンケートへの回答の傾向の違いを見
 出し、審判講習会で実際のプレーを通して実演する
 場所が確保できなかった点を改善しなければいけな

いと執行部は考えた。そして、上記のようなエビデ
 ンスを利用して総括素案を審議し、クラスマッチ
 テーマに関する全体総括での成果について、次のよ
 うにまとめた。

クラスマッチ当日は、遅れがあったにもかか
 わらず、一人ひとりの高い意識と素早い行動に
 より、午後の部では時間通りに始めることがで
 きました。また、体育祭練習の課題である「行
 動の遅さ」、「意識の低さ」を克服することがで
 きたと思います。

(2016 クラスマッチ生徒総括より)

一方、クラスマッチの取り組みの課題について、
 次のようにまとめた。

クラスマッチ前日の一部の生徒の行動により、
 当日は予定より20分遅れの開始となってしま
 いました。「自分勝手と周りの視線」を意識した行動
 ができず、多くの人に迷惑をかけてしまったこと
 は深く反省しなければなりません。

(2016 クラスマッチ生徒総括より)

そして、全生徒に次のようにアピールした。

これまでの行事から、周りを見て自ら気付いて
 行動することの大切さや、自分勝手な行動がどれ
 だけ人に迷惑をかけるかなど、様々なことを学ん
 だと思います。しかし、まだ周りに対する配慮、
自分の行動が全体にどれだけ影響を与えるかとい
う自覚をもって行動できていない人も見受けられ
 ました。「成果」はこれからも持続できるように
 努力し、「課題」については克服する方法をよく
 考えましょう。そのためには、日々の生活でも、
 スローガンを意識した行動をする必要があります。
 (2016 クラスマッチ生徒総括より)

このクラスマッチ総括素案は執行部会で決定さ
 れ、クラスマッチ総括原案として生徒会組織の中
 で全生徒に提案され、意見交流をしたあとで、前向
 きな修正案を含んで可決された。

(3) 生徒会スローガン総括の取り組み

中学クラスマッチの取り組みが終わり、新しい執
 行部を選ぶ生徒会選挙が始まったころ、執行部では
 1年間の総括をどのようにまとめるか議論となっ
 た。自分たちで設定した生徒会スローガン【気づ
 け!! 自分勝手と周りの視線】が本当にどれだけ達
 成できているのか真剣に考え始めた。1年前に生徒
 会選挙に当選して、最初に話し合った生徒会スロ
 ガンの意味をもう一度確認しあった。そして、執
 行部での意見交流を通して、自分たちが設定した生
 徒会スローガンに次のような意義を再認識した。

周りの視線に気づくということとはつまり、周り

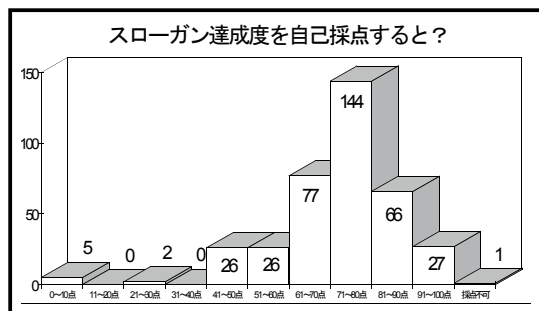
の人がどう思うかを想像するという事です。言い換えれば、客観的な視点を自分の中に身に付けるということでもあります。

まず、「こうしたい」という思いが意欲を通り越し、自分勝手なわがままになっていないか、心の中で立ち止まって問いかけます。そして、少しずつお互いがお互いを思いあい尊重しあうことにより、大切な友と出会うことができ、クラスの絆が生まれます。そうすれば附属中をもっと良い学校にできるはずだと考え、今年の生徒会の行事はこのスローガンに基づいて運営してきました。

(2016 中学校生徒会総括より)

この意義を生徒会総括として再度アピールすると決まった。また、自分たちの想いと全生徒の想いが一致しているのかどうか意見を聴いてみた方がよいという結論になり、アンケート調査を実施することになった。アンケート調査は、これまでの体育祭やクラスマッチのアンケート調査と同じ形式で作成していた。この時期になると、教員から支援しなくても、アンケート項目で自分たちが調べたい内容が確実に調査できるか考えて練り上げてから、アドバイスを求めるようになった。そして、生徒会総括アンケートを実施(有効回答数 n=374)し、エビデンスとして下のような度数分布表や記述された意見が示されていた。

2016年生徒会活動総括 アンケート集計結果
 <設問1> どのくらいスローガンを達成できたか、自分の行動を振り返り、100点満点で評価し、その理由も書いてください。



※グラフ中の数値は回答人数を示している。

- ★全く気づけなかった・覚えていなかった (0~10点)
- ★意識できたときとできなかったときがあった (41~60点)
- ★行事をするたびによくなっていった (61~70点)
- ★心がけたが完璧ではなかった (71~90点)
- ★本当は意識していることではない (90~100点)
- ★今はできるようになった (90~100点)

★点数をつけるわけではない(採点不可)

<設問2> 自分勝手だと気づいた行動があれば、どのような場面でのどのような行動か、どのように改善したか書いてください。

★講堂に集合したときなど静かにすべき場面でしゃべっていた。

⇒静かにするようにした。友達と注意しあった。

★授業開始や行事・集会での集合に遅れた。

⇒時間を意識して急いだ。

<設問3> 執行部や生徒会活動に対する意見、要望などがあれば自由に書いてください。

★中高で直接関わる機会を増やすなどして中高のつながりを深め、中学校の意見も主張したい。

★他のクラスや他学年との交流、他校との交流を深める場面を増やしてほしい。

★執行部の提案に余り協力的でない人がいると思う。

<設問1>の平均評価点は71.95点であった。執行部では、このようなアンケート調査のエビデンスを利用して、生徒会スローガンの成果について、次のようにまとめた。

アンケートでは、自分の行動を振り返ると70~80点との回答が多く見られました。自分が一生懸命何かに取り組んでいるとき、周りの人にも配慮するのは難しいことです。一年間を振り返れば、完璧にできなかったかもしれません。でも大切なのは、今きちんとできているかどうかです。そう考えると、一年間の活動の中でみんなが少しずつ成長できたのではないかと思います。

(2016 中学校生徒会総括より)

一方、生徒会スローガンの課題については、次のようにまとめた。

今回のアンケートでは設問2に対して「特にない」と答えた人が目立ちました。もちろん、日頃から周りへの配慮を忘れずに行動できていた人は特に書くことがないかもしれませんが、「特にない」と回答した人は本当にみんな、自分勝手な行動をしなかったのでしょうか? また、自分勝手な行動だと分かってはいるものの、改善できなかったという回答もいくつかありました。改善できないというのは本当の意味で気づけたとは言えないのではないのでしょうか。それから、自分の行動を0~10点に評価した人の理由の中に「スローガン

を覚えていなかった」という回答がありました。一年間スローガンにこだわって活動してきただけに残念でした。来年からは生徒会スローガンを意識し、行動してもらいたいと思います。

(2016 中学校生徒会総括より)

特に、『一年間スローガンにこだわって活動してきただけに残念でした』という文章を入れるかどうかで、執行部会は白熱した議論になった。「スローガンを覚えていなかった」という正直な気持ちを答えてくれたと仮定して相手の立場に立って考えたとき、この文章を入れると、執行部が相手の気持ちを否定・批判しているとも受け取れるが、執行部としての気持ちもしっかり伝えたいという議論であった。最後は、来年度の生徒会活動に生徒会スローガンの大切さを引き継ぐためにも、この文章を入れて、執行部としての気持ちを伝えるという結論になり、生徒会総括原案に加筆された。

このような議論を経て、来年度に向けての執行部からのアピールを、次のようにまとめた。

一部の人が低い意識で取り組むことによって、自分を律して努力している人たちまで評価が下がってしまうのはよくないことです。今年一年に限らず、これからも自分勝手と周りの視線に気づき、人の気持ちを想像する力をもっと身に付けていきましょう！

3年生のみなさんは来年高校生になります。例年、行事の際に高校生の集合が遅いことなどが課題となっているので、よくない伝統は変えていきましょう！1・2年生のみなさんは、新執行部を中心に、附属中をさらに発展させていってください！

(2016 中学校生徒会総括より)

この生徒会総括原案を全生徒に提案し、各学級で話し合う場を設定した。各学級の代表が集まる委員会で採決をするときに、「一人の失敗を他人事にせず、みんなで考えられたのは、スローガンを基に総括できていたので、この総括案に賛成です。」や「年度が変わっても今年のスローガンの意味を忘れずに、新たなスローガンにつなげて生徒会活動をしたらいいという意見が出ました」、「はじめはスローガンの意味が分からなかったけど、取り組みを重ねていくうちにスローガンの大切さが分かってきたので、もっと身近な場面でも意識して学校生活を送ることが必要だという意見が出たので賛成です」などの意見交流があった。そして、2016生徒会総括案は可決された。

このように、生徒会活動の目標や目的（V）が、この1年間の生徒会活動で継続され、関連付いた取り組みが行われてきた成果を示す賛成意見が多数を

占めた。そして、生徒会の目標や目的（V）を前向きに捉え、もっと身近なところに掲示しておくという意見や原案などを一人1枚配布して一人ひとりをもっと意識を高めて日常生活を送るという改善策も出された。

6 研究の考察

本研究の実践の中心となった中学校3年生を対象に、平成28年12月9日に生徒会活動に関するアンケート調査（有効回答数n=111）を実施した。前項4で示した検証方法を用いて、アンケート調査項目は4点評価法と自由記述式で構成した。自由記述式では、生徒会活動で自分が成長できた内容や生徒会活動の成果と課題について記述させた。これらから得られた数値や記述内容を基に考察する。

(1) 手立て①の有効性

本研究における《手立て①》は、VPDCAサイクルの目標や目的（V）を関連付けた生徒会活動テーマで生徒会の取り組みを考えさせる場を設定するであった。下の図3は、研究の《手立て①》に関する調査項目への回答結果を示したグラフである。

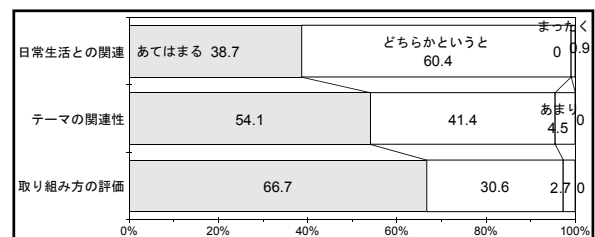


図3 《手立て①》に関する調査結果

学校行事で設定された生徒会の活動テーマが、生徒会スローガンと関連していると感じて参加しているに肯定的な考えをもつ生徒は95.5%であった。また、学校行事での生徒会の活動テーマを関連付けながら生徒会スローガンを達成しようとする生徒会執行部の取り組み方を肯定的に評価している生徒は、97.3%であった。これらの数値から、生徒会の目標や目的（V）を関連付けて生徒会活動が展開されているという過程が、全生徒に認識されているといえる。これは、生徒会執行部から提案される生徒原案のなかに、生徒会スローガンとどのように関連付けて取り組みを実施するのかという見通しをていねいに説明する文章を明記していた点が、生徒の認識に作用していたと分析できる。

しかし、生徒会スローガンの達成に向けて自分なりに生徒会スローガンの意味を考えて、日常生活の

なかで積極的に行動している生徒の割合は38.7%にとどまっている。この要因について、以下のような自由記述式の記述内容から考察する。

【自由記述式の回答から】

- 自分の行動が、周りの人の行動のちょっとしたことや学級・学年を越えたたくさんの人に迷惑になっていることに気付き、それを生徒会活動を通して、見直して直せるようになったこと。
- 一人ひとりが意識を高くもって、前に立っている人の指示には瞬時に反応する、時間厳守、服装を整えるなど、当たり前にはできるとは当たり前前にできるようにするという今までの生徒会活動でやってきたことをいかし、さらに周りに気配りができるようにする。
- まずは、生徒会の人みんながスローガンを覚え、行事だけでなく日常生活から、呼びかけなどをしながら、一人ひとりが意識していくことが大切だと思います。
- 行事に取り組んでいるときはみんな意識を高くもち行事も成功するが、次の行事では前に出た課題を反省し切れていないところがあり、行事後の総括では毎回同じ課題が出てくること。
- 日々、スローガンが目につくもしくは耳にする環境であれば、今課題となっている『行事以外』でも意識して行動できると思う。相互に呼びかけることが肝要と思う。

上記のような『生徒会スローガンの日常化』をキーワードとする生徒の記述内容が27.0%あった。

上記の「迷惑になっていることに気付き、それを生徒会活動を通して、見直して直せる」や「生徒会活動でやってきたことをいかし、さらに周りに気配りができる」という記述から、生徒会スローガンが明確な目標や目的（V）として認知されていて、さらに全生徒で生徒会スローガンを達成しようという生徒会活動の意義に関する意識レベルが上昇している様子が記述されている。

一方で、「行事だけでなく日常生活から、呼びかけなどをしながら」や「行事後の総括では毎回同じ課題が出てくる」という記述から、学校行事などの生徒会活動に取り組んでいる期間中には、生徒会スローガンに対する高い意識をもっているが、その行事だけで完結してしまう傾向にあるといえる。学校行事で生徒が身に付けた力を日常生活でいかに継続していくかが今後の鍵を握っている。この課題には、生徒会がめざす目標や目的（V）が明確に関連付いていたので、生徒が同じ基準で自分たちの活動

を振り返っているという事実も示唆している。

以上の考察から、生徒会活動は、総括で確かめられた成果と課題を新たな目標や目的（V）に関連付けて生徒会活動テーマを設定し、それを基準として再度総括できるように VPDCA サイクルの目標や目的（V）を関連付ける支援をする本研究の《手立て①》は、生徒会スローガンを規範として自らの行動を振り返りながら、主体的に改善を図ろうとする生徒を育てるためには有効であった。そして、本研究の《手立て①》が生徒会活動の支援として有効に作用したために、生徒会スローガンを日常化するための手立てが、さらに必要であるという課題が明らかにできた。

(2) 手立て②の有効性

本研究における《手立て②》は、C → A の段階で、生徒へのアンケート調査から抽出したエビデンスを示した総括資料を用いて、生徒が話し合う活動を仕組むであった。

下の図4は、研究の《手立て②》に関する調査項目への回答結果を示したグラフである。

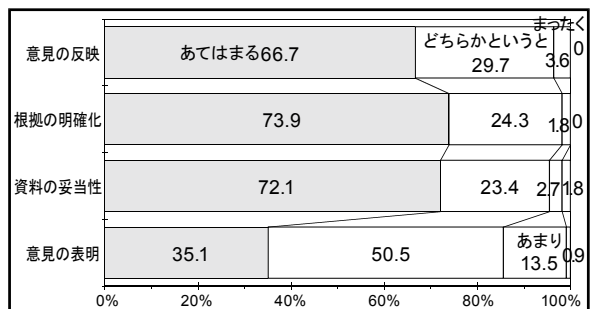


図4 《手立て②》に関する調査結果

まず、生徒会執行部が行事後に提案している総括資料に自分の意見が反映されていると肯定的に考えている生徒は96.4%である。また、生徒会執行部が提案する総括資料での主張点を導く根拠が明確になっていると肯定的に考えている生徒は98.2%であり、総括資料が妥当であると判断している生徒は、95.5%である。これは、生徒会行事や学校行事が終わったときに、生徒会執行部が4点評価法や自由記述式で構成されたアンケート調査を実施し、執行部が自ら提案した原案と照らし合わせた総括案を全生徒に提示している点が肯定的な評価につながっていたといえる。

しかし、総括原案などを用いた話し合い活動を通して、積極的に自分の考えを相手に伝えていていると感じている生徒は35.1%にとどまっている。この要因を自由記述式の記述内容から考察する。

【自由記述式の回答から】

- 掃除のときにしゃべってばかりで何もしない人がいるということは、その分掃除をしている人がいるということ。だから、全員で一生懸命に取り組むことが大切だと思います。学級で話し合いをするときも同じだと思います。一人ひとりが高い意識をもって意見を出すことで全体のためにもなるし、個人個人のためにもなると思います。
- クラスや学年などで問題が起こったとき、自分に関係ないと思うのではなく、自分の問題としてどうしたら解決につながるかを考えるようになった。
- 裏から支えている人の苦勞に気付けた。それにこたえるには精一杯の活動でこたえるしかないと思う。そこに、気付けたのは、やはり生徒会のおみんなのおかげだと思う。
- クラスで協議委員会で出た案をクラスに持ち帰ったときもう少しクラス内で協議しなくてはならない。
- 生徒会の役員から一方通行で原案の可決・否決だけではなく、全員に原案を配布し、細かい意見をやりとりする形を作ったりすることで、行事などへのモチベーションを高めることができると思う。また、目標を年単位で変更するのはなく、過去のスローガンのこともちょくちょく確認することも大切だと思う。

上記のような『総括資料を用いた話し合い活動の様子』をキーワードとする生徒の記述内容が37.8%あった。

上記の「一人ひとりが高い意識をもって意見を出す」や「自分に関係ないと思うのではなく、自分の問題としてどうしたら解決につながるかを考える」、「精一杯の活動でこたえるしかない」という記述から、総括資料を用いて話し合う場面で、学級や学年、学校内で起こる問題を自分の問題として捉え、課題を共有化して学ぼうとする姿が読み取れる。そして、生徒会全体を大局的な視点で分析している生徒会執行部のがんばりに、話し合い活動で意見を出すという行動で応えようとする意識が高まっている。

一方で、「もう少しクラス内で協議しなくてはならない」や「一方通行で原案の可決・否決だけではなく、全員に原案を配布し、細かい意見をやりとりする形を作ったりする」という記述に着目する。これらの内容は、生徒会執行部が提案した総括原案に

ついて、賛成・反対のそれぞれの立場に立って、十分に意見交流してから採決をとるという手順が徹底されずに、採決に重点がおかれた話し合い活動がすすめられている様子を示唆している。そのため、最終的な学級としての採決をする前に、自分の意見が伝えられたという満足感を十分に得られなかったために、積極的に自分の考えが伝えられたと感じている生徒の割合が低かったと分析できる。

以上の考察より、生徒会活動では、取り組みを実施・実践(D)したあとで、それを内省・総括(C)して改善策(A)を発表する場面で、生徒アンケートから抽出したエビデンスで総括資料の作成を支援する本研究の《手立て②》は、全体の課題を自分の問題として認識し、生徒会スローガンを規範として他者と協力しながら解決しようとする生徒を育てるためには有効であった。そして、本研究の《手立て②》が生徒会活動の支援として有効に作用したために、生徒が話し合い活動のなかで、自分の意見を伝え、自分が集団の役に立っているという自己有用感を得るための手立てがさらに必要であるという課題が明らかにできた。

(3) 全体考察

前項3で示したように、生徒の規範意識を育みながら、「自己指導能力」が高まったのかを検証していく。まず、下の図5は、『いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか』という質問項目への回答結果である。

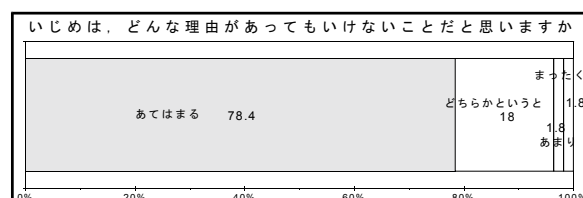


図5 「いじめ」に関する調査結果

規範意識を測る一つの指標となる質問項目であり、積極的に肯定している生徒の割合は78.4%であった。この結果について、さらに質問項目を重ねて細かく考察する。

アンケート項目『学校行事の準備期間中や当日などで、担任の先生から生徒会スローガンに関連付けた話をしてくれるときがありますか?』に対する回答結果が、図6である。

また、アンケート項目『朝や帰りのSHRなどで、担任の先生から生徒会スローガンに関連付けた話をしてくれるときがありますか?』に対する回答結果が、図7である。

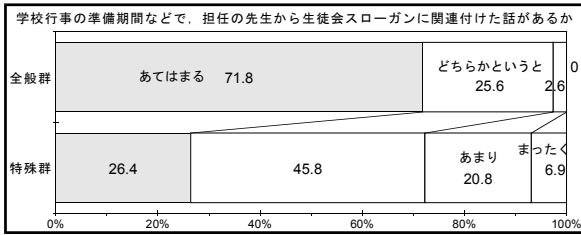


図6 教員の生徒会スローガンへの関わり方

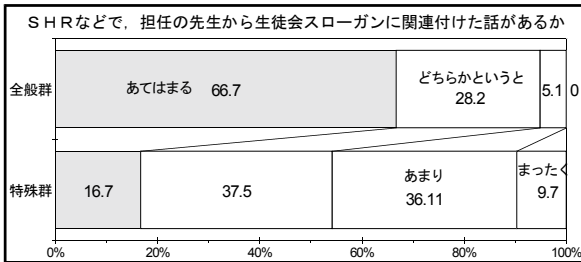


図7 教員の生徒会スローガンへの関わり方

ここで、これら2つの質問項目に肯定的に回答した割合が80%以上であるという基準を決めて、2つの比較群に分類する。

一つの群は、学校生活全般で教員が生徒に生徒会スローガンに関する支援をしているという意味で、【全般群 (n=39)】と定義した。また、それ以外の学級について、学校行事の場面を中心に教員が生徒に生徒会スローガンに関する支援をしているという意味で、【特殊群 (n=72)】に分類して、2つの質問項目への回答結果を比較した。この2つの群の肯定的な回答の割合には、有意差検定を用いて計算したところ、99%の有意差が認められた。ここでは、全職員で共通認識された具体的な生徒への指導の方策と手順を明らかにする課題が示唆されている。

次に、【全般群】と【特殊群】に分けて、図5と同じ質問項目への回答結果を示したのが、下の図8である。

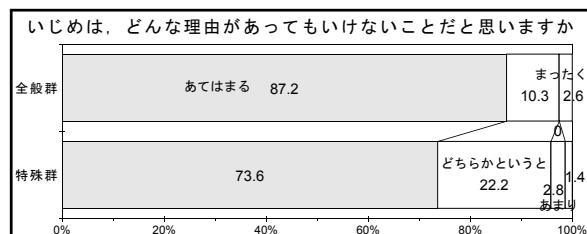


図8 群の分類による「いじめ」に関する調査結果

【全般群】と【特殊群】において、この質問項目に積極的に肯定している生徒の割合の差は13.6ポイントであり、有意差検定を用いると90%の有意差が認められた。また、【全般群】の「あてはまる」への回答の割合は、4月の全国学力・学習状況調査の同じ質問項目への全国平均値とも、90%の有意

差が認められた。

これらの数値データから、日常の学校生活で起こる問題や学級内のできごとに対して、生徒会スローガンと関連付けて教員から生徒の問題として生徒に働きかけ、集団として解決策を見出していく活動を積極的生徒指導の視点に立って支援していくと、生徒の規範意識が高まっていくといえる。

次に、『生徒会活動を通して、自分が成長できていると思うことを具体的に書いてください。』という自由記述式の質問項目への記述内容を考察する。以下に示すように、「集団、社会生活において最低限の常識として当たり前を意識することを心がけて行動する」や「たくさんの社会のマナーを学んだので、それをいかして引き続き継続」、「将来本当の社会に出ても通用するような振る舞いを学校の中で続けていきたい。」という記述が61.3%あった。

【自由記述式の回答から】

- 生徒会スローガンだから行うのではなく、集団、社会生活において最低限の常識として当たり前を意識することを心がけて行動する姿を、自己完結ではなく、後輩やできていない同級生に示すことが大切だと思った。
- 1年を振り返って、あんなことができず、できなかったと評価し満足せず、たくさんの社会のマナーを学んだので、それをいかして引き続き継続し、できなかったことを今度はできるようにしていきたい。
- 自分だけでなく、集団で特に学校という社会の中で一人自分勝手な行動をするのではなく、将来本当の社会に出ても通用するような振る舞いを学校の中で続けていきたい。そのことの基本となることを、中学生の間に教えられた。
- 以前よりも時間を守ろうという意識が大きくなったと思います。また、周りの視線を意識して行動するという事は、周りの人をよく見ることが大切だと思っているので、前よりみんなの事を知り、元気がないときは気付くことが少しですができるようになったと思います。
- 生徒会活動とは生徒全員が主体となって行事を動かしていくものです。よって、自分一人が努力しても他者が気を付けていなければ、全体として評価が下がります。したがって、私たちは自分だけでなく、周りの人にも注意を促しながら、行動するべきだと思います。
- スローガンは、学校という集団を執行部がまとめ、引っ張っていくためのものであり、その集団の一部である自分が、そのスローガン達成に

向けて何ができるか考え、今何をすべきかを意識しながら行動したい。

これらの記述は、学校内に限らず、社会に適応し、その場に応じて適切な行動を自ら考え、決定し、実行する「自己指導能力」の高まりに関する内容である。また、「前よりみんなのことを知り、元気がないときは気付くことが少しですができるようになった」や「私たちは自分だけでなく、周りの人にも注意を促しながら、行動する」のように、自分だけの努力だけでなく、他者と良好な関係を築き、協働して課題を解決しようとする生徒が育ってきている。

以上の考察をまとめる。まず、教員が生徒との対話を通して生徒の現状を分析し、柔軟な方向付けを生徒にすると、生徒会執行部は目標や目的の達成に向けた意欲や意識が高くなる。次に、生徒会執行部に対して目標や目的を関連付けたり、エビデンスを用いた総括の話し合い活動に取り組みせたりする支援によって、全生徒に規範意識が高まってくる。このとき、【全般群】の作用効果が大きいので、日常生活に潜む些細な問題に教員が気づき、生徒会スローガンに関連付けて教員から生徒に問題提起を続けていくと、より生徒の規範意識が高められる。そして、教員が意図的にVPDCAサイクルを活用しながらC→Aの段階に重点をおいて目標や目的を関連付けたり、教員が情熱をもって積極的生徒指導の視点に立って支援したりすると、全ての生徒の「自己指導能力」が高まっていくという図9のようなシステムが明らかになった。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

生徒会活動を通して、規範意識を育みながら全ての生徒の「自己指導能力」を高めるためには、教員が意図的にVPDCAサイクルを活用しながらCAの段階に重点をおいて目標や目的を関連付けたり、教員が情熱をもって積極的生徒指導の視点で生徒に関わったりする支援が有効であった。このとき、生徒会スローガンに照らし合わせて生徒に問題提起を続け、それを日常化する手立てが必要不可欠である。

(2) 課題

エビデンスが示された総括資料を用いて話し合いをする場面で、自分が集団にとって役に立っているという気持ちを生徒がもてる話し合い活動を仕組む

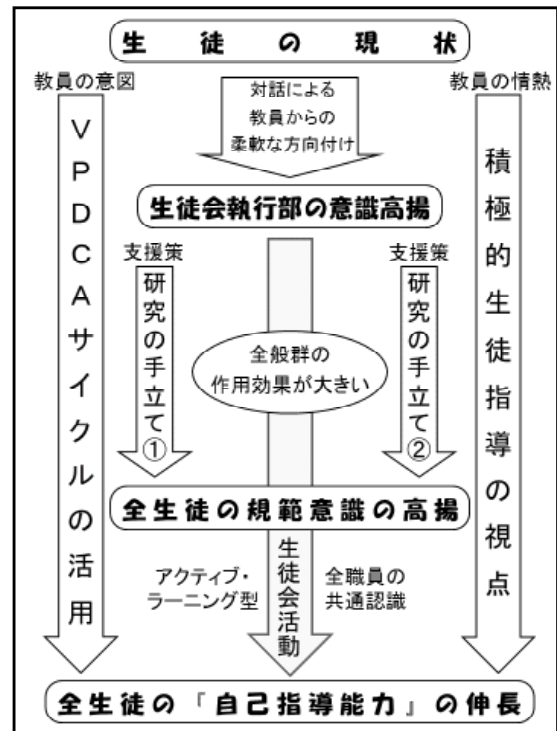


図9 研究によって明らかにできた仕組み

ための手立てや、全職員で共通認識ができていくアクティブ・ラーニング型の積極的生徒指導に取り組める方策とその手順を明らかにする課題がある。

参考文献・引用文献

- 文部科学省、『生徒指導に関する教員研修の在り方について』、平成23年
- 蘭千壽・高橋知己、『「自己組織化する学級づくり」をめざすハプスタンス型指導の提案』、千葉大学教育学部研究紀要第57巻、2009年、182